

平和のために

沖縄県立開邦高校 一年

金城 萌

六月二十三日、慰霊の日。毎年、この日が近づくと平和とは何かを改めて考える。

私が生まれ、育った自然豊かで美しい南風原町。しかし、この南風原町も六十九年前は戦場であった。そして多くの人が命を落とした。

南風原町には陸軍病院壕があった。陸軍病院壕とは、戦場で怪我をした兵士らが治療をするところだった。しかし、治療といっても手や足を切断するのが主だったと聞いた。その手や足を外に運び出す仕事をしていただのが十五歳から十八歳のひめゆり学徒隊だったらしい。

また、南風原町にはこの陸軍病院壕と近くの炊事場を結ぶ「飯あげの道」という道があった。この飯あげの道をひめゆり学徒隊はアメリカ軍の砲弾をかくぐり、命がけで近くの炊事場で作られてた食事や水を運んでいた。私は小中学生の平和学習のときに二回、この陸軍病院と飯あげの道に行ったことがある。陸軍病院の中は懐中電灯をつけないと前に進めないほど暗く、土でできているため地面はぬかるんでいた。そして何より驚いたのは両端にベッドがあったと考えられないほどの狭さ。この狭い陸軍病院壕の中に怪我をした多くの兵士が収容され、ひめゆり学徒隊は必死に働いていたのだ。

飯上げの道は、陸軍病院壕が小高い丘の上にあるため、傾きが急で道のりが長くなっている。実際にこの飯あげの道をのぼったとき私は何も持っていなかったが、頂上につくと息切れをしていた。ひめゆり学徒隊は、この大変な道のりを思い食糧を担いで 丘の上までアメリカ軍に見つからないように駆け上が

っていたのだ。必死に。生きるために。

私と同じくらしい歳の少女たち。彼女らにも、今の私たちと同様に一人一人、夢を持っていたと思う。しかし、戦争がその夢を奪ったのだ。希望を奪ったのだ。そして大切な命までも。

私が友人と笑い合っているとき、家族とおいしいご飯を食べているとき、安心して夜寝ているときでも、世界中のどこかで、戦争は起こっている。

戦争を始めるのは人間。終わらせるのも人間である。

では、どうすれば戦争がこの世界からなくなり、平和になるのか。

私は平和学習を通して、戦争の悲惨さ、平和の尊さを学んだ。しかし、時間が経つにつれ日々の生活に戻ると、学んだ事を忘れていってしまう。忘れないように私たちができること。それは戦争について学び、平和について深く考え、次の世代へ語り継いでいくことではないだろうか。

私は、小学生の時平和学習の時間が好きではなかった。戦争のビデオや写真を見ると、もし今戦争が始まったらどうしよう、もし自分が死んでしまったら、など想像すると本当に怖くて眠れない夜もあった。しかし、何も学ばず、何も知らないで、語り継ぐことすらできない。

「平和とは何か」

と聞かれると返ってくる答えは一人一人違ふと思う。それでいい。返ってくる答えが違っても、平和を思う気持ちを持っていれば、戦争はなくなり、平和は実現すると思う。

私の父は、平和ガイドとして南風原陸軍病院壕でボランティアで案内をしている。父は戦争を体験したわけではない。しかし、戦争について学び、平和について考え、沖縄戦の記憶を次の世代に伝えたいという思いでやっている。

太平洋戦争が終結してもうすぐ七十年が経

つ。私の祖父は戦場に行き、生きて帰ってきた。しかし、私が幼い頃に亡くなってしまい、戦争のことを祖父から何一つ聞くことができなかった。戦争を知っている人が減ってきている。それは仕方のないことだ。だからこそ今、私たちができること。それは次の世代へ語り継いでいくこと。忘れないよう、できるかぎりの努力をする。それが、戦争をこの世界からなくし、平和になるためにとっても大切なことだと思う。

平和な世界をつくっていくのは私たちである。壊すのも私たちである。

私たち一人一人が平和な世界をつくるために何ができるのか考え、行動したい。

世界中の誰もが「私たちの世界は平和だ、幸せだ」と言える日が訪れることを願っている。